

被災高齢者・障害者支援の現地報告第1報

「宮城県石巻市の障害児2人への緊急支援」

NPO法人福祉フォーラム・ジャパンの宮武会長と新田副会長の命を受け、宮城県石巻市を訪れたのは、震災から1ヶ月が経とうとしている4月9日のことでした。震災以来、毎日のようにメディアで伝えられる岩手県宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、宮城県気仙沼市、南三陸町、東松島市などを巡った私にとって、石巻市の復興は余りにも遅れて見えました。訪れたどの街も壊滅的な被害を受け、再建の目処が立っていないのは一目瞭然でした。しかし、避難所の生活には大きな差がありました。多くの避難所は高台に設置され、ある程度のライフラインが復旧していましたが、湊小学校は津波被害の中心部にあり、未だ殆どのライフラインが復旧していない状況で避難生活を余儀なくされていました。

<石巻市内の様子>

私が石巻市立湊小学校に到着したのは、4月9日の15:00過ぎのことでした。避難所の周りにも家屋の瓦礫や車、船が散乱し、車道を確認するため重機での作業が行われていました。「ここが避難所か？」と思わず言葉に詰まりました。辛うじて校庭に壊れていない車が整列されていたので、ここが避難所であることが分かったほどです。



① 石巻市内の様子



② 湊小学校前の様子



③ 車が放置されたプール

避難所で私達を出迎えてくれたのが、避難所本部のリーダーである庄司氏でした。庄司氏は現職の石巻市議会議員であり、震災直後に住民を引き連れ避難し、以来ずっとこの避難所を支えています。2階に案内され、そこが伊勢さん(脳性まひの方)の避難生活の場となっていました。床ずれ予防のマットを必要としていた伊勢理加さん(写真④右)と知那子さん(写真④左)が出迎えてくれました。

10畳ほどの部屋に入ると、毛布が敷き詰められており、寒さは殆ど感じませんでしたが、ここで寝泊りを続けていれば、床ずれの危険が高いことが簡単に想像できました。「どんなクッションですか？」という理加さんの問いかけに対し、「ウレタンのクッションをくり抜き、電気を使わない空気室

構造のロホマットレスをはめ込む簡単な構造ですよ。」と返答すると、「こんなに大きいのですか！」とびっくりした様子でした。

避難所では、わずか1m20cmほどの幅に、3人並んで寝なければならず、ベッドで使うマットレスでは大き過ぎて並んで寝ることができなくなります。そこでウレタンのマットを知那子さんのスペースに合わせて切り、床ずれの危険が伴う部分だけロホマットレスをはめ込むことにしました。「これだったら皆と寝られるね。」と理加さんが知那子さんに語りかけました。ロホマットレスの空気調整を行うと、知那子さんも安堵の顔が伺えます。私は、喜ぶ理加さんと知那子さんを見て、「来て良かった」と思う反面、「もっと早く届けられれば」とも思いました。

<湊小学校での避難所生活>

湊小学校では、避難所の環境が整う前に、避難所生活が始まってしまいました。地震直後、「津波が来る」という理加さんの判断から一目散に避難所に駆け込んだそうです。避難所も1階部分は津波に飲まれ、海水が引いた後には瓦礫の山が残り、道も何もなく、避難所も孤立してしまいました。環境が整った避難所へ移る手立てもなく、被災地の真ん中で今でも生活しなければならないのです。

④ 伊勢理加さん(右)と知那子さん



⑤ カットしたウレタンクッションとロホマットレス



理加さんは、「振り返ると被災後の3週間くらい、回ってくる医師は生命維持の医療が中心で、ケアを考える余裕はなかった」と感じていました。新田副会長らの医師団によって床ずれの危険性を指摘され、その思いを改めて感じたそうです。加えて、理加さんは「在宅生活者にとって災害や緊急事態における、在宅医療用具の予備が必要。」とも指摘しています。

脳性まひで寝たきりの状態の上、知那子さんは胃ろうを造設しています。PEGカテーテルのストッパーなどが破損する場合もあり得ます。身体の小さい知那子さんに合うPEGカテーテルも限られており、予備を持っていなければ、医師が近くにいても交換できず、生命の危機につながります。災害後によりやく予備を持たせてくれたそうですが、災害前までは予備を持たせてくれなかったそうです。

<在宅生活者も困難状態>

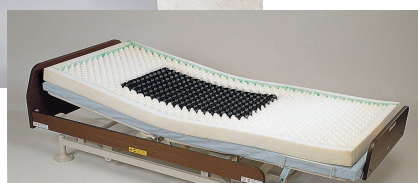
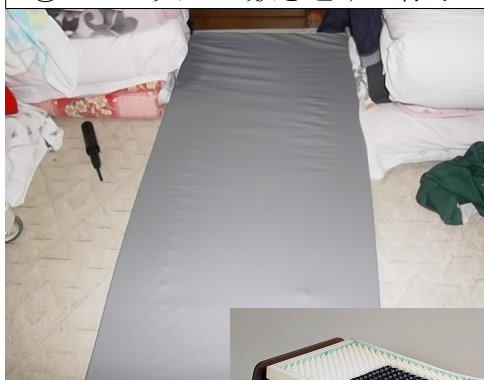
その後、理加さんより、「知那子の友人の綾女ちゃんが同じように親戚の家に避難しているから心配で」と紹介を受け、湊小学校から1.5kmほど離れた場所に移動することにしました。持ってきたドライシャンプーを理加さんに差し上げ、避難所を離れようとする、理加さんより綾女さんのお母さん宛に衛材関係の物資を受け取りました。色々な物資を避難所へ持ち込むことはあっても、避難所から在宅避難者に物資を提供しなければならない事態でした。

綾女さんが避難している先で出迎えてくれたのが、お父さんの新田英樹さんでした。震災当時は綾女さんの卒業式で、家に帰った直後の被災でした。津波を逃れるため、まずは高台に避難し、その後親戚の家に避難しました。

家の中に入ると暖かく、電気も復旧していました。綾女さんが普段使っている布団を端に寄せ、床ずれを予防するためのロホマットレスの説明を行いました。ベッド用のマットレスを敷くスペースは確保できたため、ウレタンマットレスはカットせずに使用することにしました。空気調整を行い、床ずれの危険も回避できました。

英樹さんに「他にお困りのことは？」と尋ねると、「妻が理加さんと電話でやり取りしているから何とかできています。」とのことですが、被災地の在宅避難者に対して情報は伝わりにくいそうです。

⑥ ロホマットレス敷き込みの様子



カバーを取ったロホマットレスのイメージ写真

⑦ マットレス導入後の新田綾女さんの様子



<被災地を訪問して・・・>

今回の訪問を通じ、1ヶ月余り経過した被災地の状況は、生活の観点では大きな違いがありました。街全体が別の街に避難しているケースや、福祉施設の入居者がまとまって別の施設や病院に避難しているケースもあります。しかし、もともと在宅で生活していた高齢者や障害をお持ちの方々は、避難所か親戚を頼らざるを得ず、避難先の生活環境が大きく異なります。情報やサービスが中断され、特にケアが行き届かない状況が発生しています。4月10日には、石巻市でボランティアの医師や看護師60名ほどで、在宅避難者の実態調査を実施しています。しかし、市の保健師さんの情報を頼りに1件1件あたるしか方法がなく、それでも市内の一部の地域しか回れていません。まだまだ情報提供とサービスを行き届かすには時間が掛かる見込です。また、避難生活は随時変化し、そのニーズに合わせた迅速な支援が必要不可欠になります。このような事態では、医療・福祉だけでなく、地域住民含めたさまざまな方々との他職種連携により、生活の確保と新たなニーズに基づくサービスの確立が必要といわれています。

平成23年4月11日

福祉フォーラム・ジャパン、日本アビリティーズ協会協働プロジェクト

被災高齢者・障害者支援協力隊 副隊長

中村 靖彦